

第36回 くるめの考古資料展

# 正福寺遺跡は語る

～縄文時代の<sup>なりわい</sup>生業～



期間 平成23年10月22日～11月13日

会期中無休

時間 午前9時～午後5時

会場 久留米市埋蔵文化財センター

(久留米市諏訪野町1830-6)

正福寺遺跡出土 アミカゴ

久留米市 市民文化部 文化財保護課

## ごあいさつ

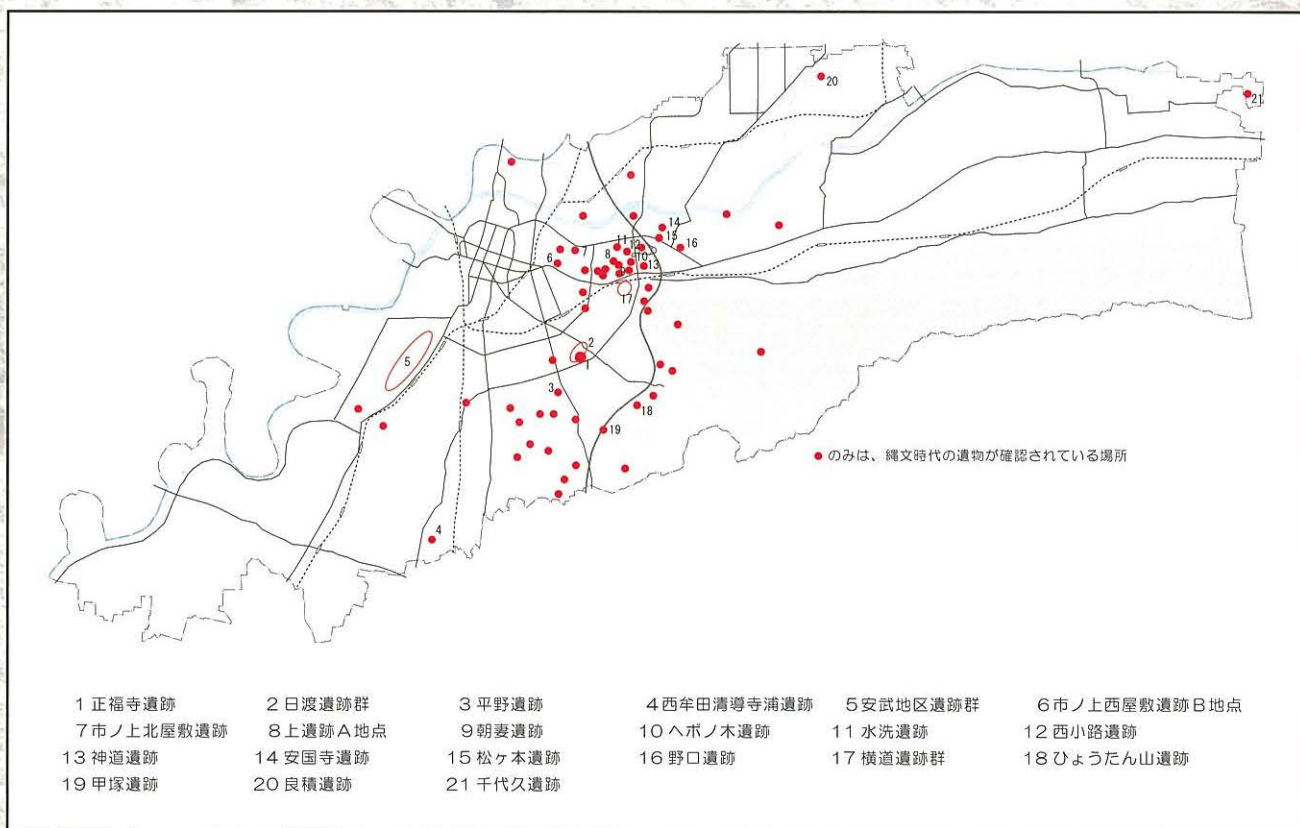
毎年11月には「文化の日」をはさんで「文化財保護強調週間」がございます。この期間は、文化的・歴史的に意義のある文化財が数多くある事を広く認識していただくもので、文化財の普及・啓発活動の好機でもあります。

久留米市では、この一環として毎年「くるめの考古資料展」を開催し、市民の皆様にご久留米市の遺跡・歴史を紹介しております。36回目の本年度は「縄文時代」をテーマとして、久留米市の縄文時代を代表する遺跡、「正福寺遺跡」の出土遺物を中心に、縄文人の暮らしが垣間見える展示を企画いたしました。

展示をとおして、「いにしへの久留米」の息吹を感じていただくとともに、文化財について考えていただく機会になれば幸いです。

末文になりましたが、展示会を開催するにあたりご協力いただきました多くの関係機関、関係者の皆様方に深く感謝の意を表します。

平成23年10月22日  
久留米市長 檜原 利則



久留米市内の主要縄文遺跡分布地図

### 資料提供にご協力いただいた機関（敬称略）

熊本県教育庁文化部（黒橋遺跡出土の大珠写真）

唐津市教育委員会（徳蔵谷遺跡出土の大珠写真）



## 縄文時代について

今から約1万2000年前、世界中で大規模な気候変動が始まりました。寒冷な気候から温暖な気候への変化です。この温暖化によって動植物の種類も大きく変化し、日本列島でもこの変化に適応した文化が生まれました。「縄文時代」の始まりです。縄文時代は数千年続き、遺跡は北海道から沖縄まで広く分布しています。

縄文時代を特徴付ける新しい技術といえば「土器」の出現で、「縄文土器は世界最古の土器」といわれています。青森県の<sup>おおひらやまもといちいせき</sup>大平山元Ⅰ遺跡で発見された土器には、科学的な年代測定で約1万6500年前という数値が測定されたものもあります。土器の出現によって、煮炊きをするという調理方法が出来るようになり、食材の幅が大きく変わりました。食材の広がりや暮らしへの様々な変化をもたらしていきま

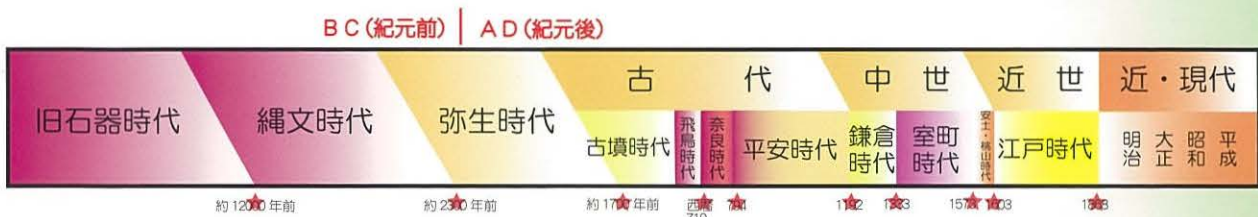
した。<sup>しゆりよう</sup>狩猟も様変わりを見せ始め、狩りに使用する石器などの道具に変化がみられます。食べ物を<sup>こうりつ</sup>効率よく手に入れるため、それまでの移動しながらの暮らしから、弓矢や落とし穴などを用いて小動物を狩ったり、木の<sup>ちよぞう</sup>実を採集して貯蔵したり、骨を加工して作った道具で<sup>ぎよろう</sup>漁撈を行うなど、安定した生活ができる定住への<sup>きばん</sup>基盤が築かれていきました。

久留米市内でも多くの縄文時代の遺跡が見つかっています。なかでも、野口遺跡<sup>のぐちい</sup>（山川町）や正福寺遺跡<sup>しょうふくじいせき</sup>（国分町）は久留米市を代表する縄文時代の遺跡で、正福寺遺跡からは、ドングリやアミカゴなどの貴重な遺物が多数発見されました。また、安武地区遺跡群<sup>やすたけちくいせきぐん</sup>（安武町）では、1列に配列された落とし穴が確認されていて、縄文人が集団で計画的な狩猟を行っていたことを示す重要な証拠です。同じように、配列された落とし穴<sup>にしむたせいとつじうらいせき</sup>は西牟田清導寺浦遺跡（三潴町）でも確認されています。



安武地区遺跡群（今泉遺跡）で確認された落とし穴  
写真右側に並ぶ白いラインの遺構が落とし穴です。

## 日本の歴史年表



## 正福寺遺跡の概要

正福寺遺跡は、久留米市国分町に所在する福岡県を代表する縄文時代の遺跡で、今から約4000年から3000年前の縄文時代後期を中心に栄えた集落跡です。正福寺遺跡の集落では、丘陵上きゅうりょうじょうの居住域きょじゅういきと谷底にある作業場が発見されています。居住域からは、土坑どこうと呼ばれる穴や縄文土器がまとめて発見されていますが、残念なことに、たてあなじゅうきょあと竪穴住居跡などはまだ発見されていません。谷底に位置する作業場は水場遺構みずばと呼ばれるもので、正福寺遺跡の場合はドングリを貯蔵していた穴と、木などを水に漬けていた穴が見つっています。集落は、この谷を中心として周辺の丘陵に広がっていたものと考えられます。遺跡の周辺は、きれいな水が豊かに湧き出す場として昔から知られていた所で、発掘調査では、現在の地表から2mほど掘り下げた所で4000年前の谷が発見されました。谷は、現在でも豊富な湧き水があり、調査時には24時間ポンプで水を汲み出さなければならないほどでした。



きれいな湧き水が幸いしたのか、谷底からは様々な発見がありました。多くの土器や石器と共に、ドングリやアミカゴ、木鉢きばちや杓子しやくしなどの木製品、色々な種たねや葉、骨や虫といった普通なら腐って無くなるものが数多く発見されています。

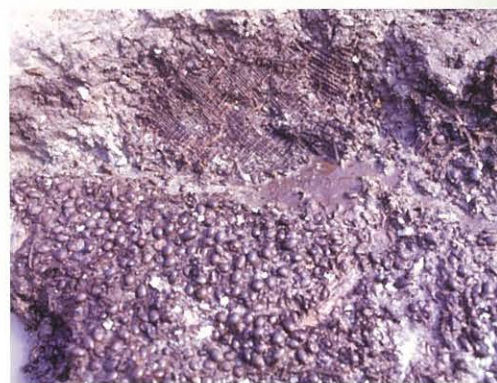
このような、木や植物を観察することによって、4000年前の縄文人がどのような生活を送っていたかが明らかになってきます。正福寺遺跡の集落は、森の一部を切り開いて造られ、集落の周辺にはドングリを豊かに実らす森が存在していたのではと考えられます。調査中には大量に貯蔵されていたドングリが発見されていて、縄文人がドングリを食料として重視していたことが分かります。また、森の中でドングリや木の実などを採ったり、イノシシやシカといった小動物を獲って生活していた、正福寺遺跡に定住した縄文人の姿が徐々に解明されてきています。



アミカゴの出土状況



発見された木の葉



大量に出土したドングリ



## 獲ると採る

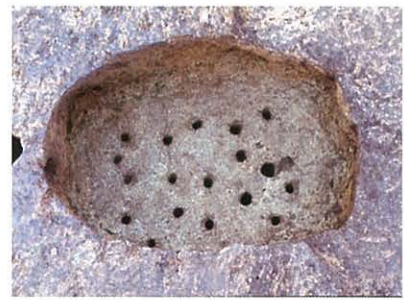
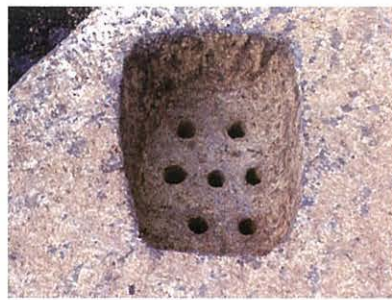
「獲る」とは、狩猟や漁で獲物を捕らえることを指す言葉です。動物や魚を道具を使って捕ると考えればよいでしょう。縄文時代の「獲る」には、「落とし穴」や「弓矢」や「石槍」を使ってイノシシやシカや鳥を獲る狩猟と、「釣針」や「網」を使って魚や貝を獲る漁撈があります。正福寺遺跡からは、弓矢に使う石の鏃が多く見ついている他、石槍の先端部分も数は少ないながら発見されています。落とし穴は、市内では安武町の遺跡から一列に並んで発見されており、落とし穴には色々な種類があることも明らかになっています。しかしながら、魚を獲る道具である「釣針」や「網」については、まだ市内からは見つかっていません。ただ、「網」の重りに使ったと考えられる石錘が多く発見されていることから、漁をしていたことは推測されています。



「とる」に使用されていた道具（いずれもレプリカ）  
石斧（上）石槍（中）矢（下）



矢の先に装着された石鏃



安武地区遺跡群で発見された様々なタイプの落とし穴。縄文人たちは、追い込んだ動物が穴の底に立てられた先の尖った杭にささって身動きが取れなくなったところを捕えていたのでしょう。



「採<sup>と</sup>る」とは、木の実やキノコなどの植物を得ることを指す言葉です。遺跡から出土するものから「採る」を確認することは非常に困難なことです。正福寺遺跡からは多くのドングリやアミカゴが発見されていて、「採る」を直接目で見る事ができます。縄文時代の「採る」ものといえば、木の実・キノコ・山菜<sup>さんさい</sup>・根茎類<sup>こんけいるい</sup>（ヤマイモなど）などですが、大半のものが腐<sup>くさ</sup>りやすく、当時のものが我々の眼に触れることはほとんどありません。正福寺遺跡で見つかったドングリは、アミカゴに入った状態で出土しています。縄文人たちは、森の中に籠<sup>かご</sup>を背負ってドングリを採りに出かけていたのでしょう。また、発見されたドングリには異なった種類のドングリがあることから、彼らはドングリを種類ごとに分けて採集し、貯蔵していたことがわかります。



アミカゴからはみ出したドングリ。



出土した大型のドングリ



アミカゴに入った大型ドングリとヒョウタン（右上）



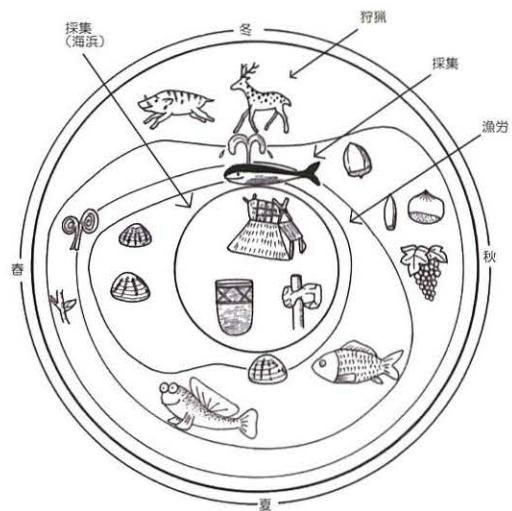
出土した木の実



## 食べる

縄文時代の人々は、自然のサイクルの中で狩猟をし、漁を行い、採集したものを食べて生活していました。中でも重要な食糧であったドングリは、大量に貯蔵され、年間を通して食べられていたと考えられます。

保管の方法は、カラ付きのまま生で保管される場合と、皮をむき日干しして保管される場合とがあったことが分っています。食べ方に合わせて使い分けていたのかもしれませんが。正福寺遺跡では、ドングリの皮を捨てた穴が見つかっていて、この場所で加工も行われていたことが分っています。皮の破片の中には、甘栗を剥くように皮を横方向に割っているものもありました。皮の剥き方が現代と共通する点があるというのは面白い発見です。



縄文カレンダー  
(小林達雄氏作成図を参考に作画)

## 調理する

縄文時代の主な調理方法には、土器を使った煮炊きと集石炉を使った蒸し焼きなどがあります。

採集したドングリは、籠や袋に入れて水辺の穴で生貯蔵したものや、天日で乾燥させたものを、石皿などを使って粉にして調理にしていました。ドングリの粉は、水や卵と煉ってクッキー状にして、焼け石の上で焼いて食べたり、土器を使って山菜などと一緒に煮て、食べられたと考えられています。

漁や狩りで捕獲してきた獲物は、集石炉で蒸し焼きにして食べてられました。現代風にいえば「バーベキュー」です。こういった集石炉は、久留米でも数多く発見されています。



石皿を使った調理 (正福寺遺跡出土)



集石炉での調理 (想像図)





## 作る

正福寺遺跡のアミカゴは、モジリ編みと呼ばれる技法で作られています。この技法は、縦ヒゴに対して横ヒゴを2本使ってよ搓つるっていく方法です。素材は、蔓植物が使用されています。分析の結果では、「テイカカズラ属」と「ウドカズラ」が使用されていることが分かっています。どちらのカズラも水辺に多く見られるもので、縄文人は身近な素材を使ってアミカゴを作っていました。



口縁部の拡大

縁は、縦ヒゴを編込んでいます。縁の下にあるクサリの様なものは装飾部分で縄文人のセンスがうかがえます。

正福寺遺跡出土アミカゴ

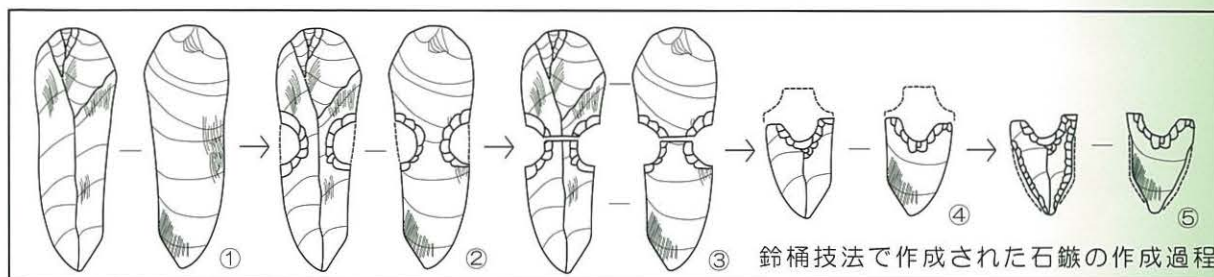
カゴは部位によって編み方が変えられています。

## 縄文時代の石器

石器は石を鹿の角や動物の骨などを使って打ち欠いて作ります。旧石器時代と比べると、石を磨みがいて形を整える技術や孔をあける技術あなが発達してきます。表面が滑らかに整えられた石斧や、細かな加工を施した物に、紐ひもを通す孔をあけた首飾りのような装飾品も増加しています。

気候の温暖化の影響で大形の動物が減って小形の動物が増えたことから、狩猟具では小形の動物を狩るための弓矢が出現しました。矢の先端につける石鏃せきぞくは縄文時代を代表する石器の一つで、久留米市内でも多くの遺跡から見つかっています。石鏃は時期によって形が変化し、縄文時代後期には剥片鏃はくへんぞくと呼ばれる特殊な加工方法すすおけぎほう（鈴桶技法）によって作られる石鏃が登場します。

石斧は、木を伐採したり土を掘り起こす道具で、長方形や撥形ばちがたをしているものがあります。正福寺遺跡では石斧が柄えに装着された状態で発見されています。



① 礫から素材となる剥片を取ります

② 中央を抉くります

③ 抉った部分を折ります

④ 折った部分を鏃の形に整えます

⑤ 先端を尖とがらせて完成!!



## 縄文時代の交流

出土品の中には形や使い方、材料の産地などが限定される土器や石器があります。これらが別の地域で発見された場合、何らかの方法で運び込まれたことがわかります。久留米市内の遺跡から出土する土器や石器の中にも、他地域から持ち込まれた土器、石器が混じっています。

その代表例として、大分県の<sup>ひめしま</sup>姫島でしか採集されない灰色の<sup>こくようせき</sup>黒曜石が久留米市内の遺跡から出土しています。また、土器の文様でも他地域からの影響を受けたものがあります。縄文時代前期に位置付けられる野口遺跡で発見された土器は「野口式土器」と呼ばれており、これは西九州に分布する<sup>とどうきしき</sup>轟式土器と<sup>そばたしき</sup>曾畑式土器の中間に位置づけられるもので、轟式土器の影響を受けたものと考えられます。このことから縄文時代前期における西九州との関係が窺えます。

正福寺遺跡から出土している土器には、<sup>あたかしき</sup>阿高式土器、<sup>なんぶくじしき</sup>南福寺式土器、<sup>さかのしたしき</sup>坂ノ下式土器などがあります。また、<sup>いちのうえきたやしきいせき</sup>市ノ上北屋敷遺跡からは<sup>ふなもとしき</sup>船元式土器が出土しており、これらは縄文時代中・後期を代表する土器です。前者は西九州を中心に東九州を除く九州全域に分布する土器で、表面全体に刻み込んだ<sup>ほどこ</sup>線を施しています。後者は瀬戸内地方から北九州に分布する土器で、開いた口縁部が特徴的です。縄文時代後期になると<sup>かねさきしき</sup>鐘崎式土器、<sup>きたくねやましき</sup>北久根山式土器、<sup>みまんだしき</sup>三万田式土器が出土しており、これらも中九州の西側を中心に分布する土器です。



阿高式土器（正福寺遺跡出土）



北久根山式土器（正福寺遺跡出土）



坂ノ下式土器（正福寺遺跡出土）



九州における縄文土器の分布範囲図  
前川威洋「九州後期縄文土器の諸問題」を参考に作図



姫島産黒曜石（正福寺遺跡出土）



船元式土器（市ノ上北屋敷遺跡出土）



鐘崎式土器（正福寺遺跡出土）



鈴桶技法（正福寺遺跡出土）

## 縄文のころ

縄文時代の道具は2種類に分類されるといわれています。日常に使用される「第1の道具」と、その形態から機能用途を想像することが困難な「第2の道具」と呼ばれるものです。「第2の道具」は呪術や祭りに関連すると言われていています。日用品とは違い、超人的な力を操る道具をして製作されていたのではないかと考えられています。久留米市内の縄文時代の遺跡からは「第2の道具」はあまり発見されていません。



久留米市内で発見された「第2の道具」

- (左) 石冠 (西小路遺跡出土)
- (中) 石棒 (西小路遺跡出土)
- (右) トロトロ石器 (久留米市内表採)



現在確認されている主なものは、トロトロ石器、丸玉（野口遺跡）、大珠・石刀・有孔円盤（正福寺遺跡）、石棒・石冠・線刻土器（西小路遺跡）などです。石刀や石冠や石棒は「異形石器」とよばれていて、実用としての機能に結びつかない遺物です。大珠は身につける道具と考えられていて、縄文時代中期以前は、翡翠製のものが多く作られていたようです。翡翠は緑に輝く硬玉として流通していましたが、縄文時代中期になると原石の入手が困難になったのか、大型のものは姿を消し、代わりに小型品や翡翠に似た色の石材を用いたものが増えていきます。正福寺遺跡出土の大珠は滑石製のものです。玉やアクセサリーなどは、身を護る強い力を信じて装着されていたと考えられます。

これらの役割や性格を考えることは、縄文人の観念に近づくひとつの近道といえるのではないのでしょうか。



大珠の出土状況 (正福寺遺跡)



正福寺遺跡



黒橋貝塚 (熊本市)  
熊本県教育庁提供



徳蔵谷遺跡 (唐津市)  
唐津市教育委員会提供

大珠





正福寺遺跡出土 杓子

第36回 くるめの考古資料展 なりわい  
正福寺遺跡は語る～縄文時代の生業～

平成23年10月22日発行

編集・発行 久留米市市民文化部文化財保護課  
〒830-8520 久留米市城南町15-3  
TEL0942-30-9225 FAX0942-30-9715  
久留米市埋蔵文化財センター  
〒830-0037 久留米市諏訪野町1830-6  
TEL0942-34-4995 FAX0942-34-5045  
印刷 中村印刷株式会社